帝国主義の腐朽性に抗し
共同反革命を蜂起－内戦へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

戦旗

6月5日
5日、20日発行
404号
1部　100円
編集発行人　鹿島　昂
購読料　1部 20回 2600円（郵送料含む）

戦旗社
東京都新宿区新宿5の2の9
コーポハピービルE1号
電話　03（356）2982
振替　東京 26110

首都40万厳戒体制をうち破り

6・28東京サミット粉砕！

春期人民決起の完遂かけ、地域・職場・学園からの総決起を

元号法の成立弾劾！

すべての同志・友人のみなさん！

5・20三里塚、5・23狭山再審決戦の大高揚をたたかいとったわれわれは、この大きな人民決起の成果をひきつぎ、日帝・大平の反動攻勢との総対決をかけて東京サミット粉砕闘争の一大爆発を何としてもかちとらなければならない。

この東京サミットこそ、長期不況とインフレ・エネルギー危機、そしてイラン人民をはじめとした第三世界人民の革命的決起に追いつめられた帝国主義ブルジョア支配者共が、危機のりきりのための共同の反革命攻勢をつくり出す場であり、資本の延命のために、人民へのより大きな抑圧と暴虐支配を強いるものである。米帝カーターのエジプト・イスラエルの「和平」を通じた〝中東の憲兵化〟と米軍の中東派兵準備や在韓米地上軍撤退中止を宣言するための、カーター訪韓発表、日帝・大平の元号法制化、三里塚空港二期着工宣言、七九春闘圧殺と全逓八千人処分、さらに狭山再審棄却の策動と5・23大量不当弾圧、そして

狭山再審決戦勝利、明治公園を埋めつくす五万の人民　（5、23）

6・28
東京サミット粉砕闘争
午後2時・芝公園

6・23
サミット粉砕統一集会
集会実行委・場所未定

防衛大綱見直しによる五次防策定など、日米帝のこの間の一連の重大な反動攻勢は、まさに東京サミットでの危機のりきりの共同戦略を発動する地ならしに他ならない。

われわれは、東京サミット粉砕のたたかいを、露骨な軍事制圧を含む敵対に直面しているアラブ・朝鮮人民との階級的連帯をかけたものとして、さらには、狭山・三里塚をはじめ、あらゆる職場・地域・学園でたたかう日本の労働者人民の未来をかけたたたかいとして、巨大な人民の起ちあがりをつくり出し、全党全人民の総力でこのたたかいをかちとるのでなければならない。

日帝支配者共は、サミット開催に向けて、すでに二万五千というかつてない警察力の総動員をかけ、首都戒厳体制のぶ厚い壁の中で、密室会談を挙行しようとしている。そしてまた、社共などは、ブルジョア支配者共の危機感に同調し、経済大国日本の「経済主権」を欧米の圧力に屈せず守りぬけと主張し、サミットの根底的な反動性と対決せず、逆に国益国防論にまき込まれその補完物になり下ってしまっているのである。

われわれはかかる社共既成革新の腐敗とはっきり訣別し、狭山・三里塚をたたかい、反動の嵐の中で起ちあがっている多くの労農人民、被差別大衆と手を結び、権力の戒厳体制をうち破る巨大な人民決起の奔流で、東京サミットを粉砕しようではないか！

春期人民決起の完遂をかけて、重大な決意をもって、6・23―28東京サミット粉砕に死力を尽して決起しよう！

危機にあえぐ帝国主義の戦争的まき返しのための結束を、全世界の被抑圧人民と連帯して打ち破ろう！

まずはじめに、われわれは東京サミットが何よりも第三世界と労働者国家に敵対し、この攻勢を抑えこむ帝国主義の共同した巻き返し戦略を発動するものであることをはっきりとつかみとるのでなければならない。

現在の帝国主義諸国をかつてない不況・インフレ・エネルギー危機におとしいれている最大の要因は、これまで、帝国主義の支配の下で国土と資源、そして労働をとことん収奪されてきた第三世界人民の自己解放をめざした決起に他ならない。七四年アラブ諸国の「石油戦略」発動や、七五年インドシナ人民の解放闘争の歴史的勝利はその典型である。

七一年ニクソン「新経済政策」によるIMF・GATT体制の崩壊と、これにひき続く石油危機、そして最強といわれた〝世界の憲兵〟たる米帝のインドシナからの敗退は、帝国主義の政治・経済・軍事の総体にわたる戦後支配体制を破壊し、これに代るどのような支配体制もいまだつくり出し得ていないことい、さらにこの点において、今日の帝国主義の危機的事態の本質が存在するのである。

そしてまた、かかる危機的事態を打開する道としてサミット（先進国首脳会談）の歴史的政治的位置の重大さがある。第一回ランブイエ会議が、七五年十一月に始まっていることは、このサミットのもつ本質的意義を明白に映しだしているのである。かつては一国一国が強大で、互いに世界の覇権を競い合った帝国主義支配者共が、今日では、不況やインフレ、エネルギー危機など、どれ一つとっても一国単独では解決不可能なものとなり、各国が協調して危機に対処する以外にいかなる打開の道も見い出せなくなっているのである。

したがって、サミットは、まさに七〇年代後半から八〇年代に向けて、帝国主義の反革命協調をつくりだし、第三世界や労働者国家に敵対していくための共同の戦略を発動するものとしてある。このサミットの反革命的本質がまず確認されなければならない。

第二に見ておかなければならないことは、この反革命協調が、これまでの四回のサミットの破産によって、一層積極的な協調を求めざるをえなくなっていることである。

帝国主義者共は、七五年ランブイエ以来、七六年サンファン、七七年ロンドン、七八年ボンの四回のサミットを通じて、経済の持続的拡大をはかる需要管理政策の推進や、国際収支の改善など、資本主義市場の安定と発展をはかる政策調整を打ちだしながら、結束を固めて、アラブ諸国をはじめとした第三世界への分断と抱き込み、中ソ対立への介入によってその延命をもくろんできた。そして、これによって石油価格の高騰を抑え、オイルマネーを米帝に還流させるなど、一時的な実効をつくり出したが、結局のところ危機の深化をおしとどめることはできなかった。国家財政投資による需要の喚起も、景気の停滞を回復することができず、逆に大規模な財政赤字とインフレの再燃という事態をひき起こしている。しかも日・米・欧の貿易不均衡も拡大するばかりである。

こうした中で、今年に入ってからのイラン革命、OPECの原油価格値上げは、この間の帝国主義の危機のりきり策を総破産させるものであった。また、今春の米原発事故は、原発で石油危機に対抗しようとするブルジョア共の甘い夢に冷水を浴びせかけた。

いま、東京サミットを前にして「民間サミット」と言われる日米欧委員会やOECD閣僚会議などで、ブルジョア支配者共は、新たな危機のりきり策の一つとして、これまでの需要管理政策に代わる積極的調整政策（PAP）への模索を開始している。このPAPとは、抱えている衰退産業を中進国（韓国やASEAN諸国）や他の先進国に移し、新しい分野への積極的転進をはかるというものである。すなわち、競争力の低い生産部門を切り捨て、強い部門（原発や高度な電子機器など）へ資本の集中をはかるという産業構造再編を、中進国も巻き込んだ資本主義市場の総体において実現して行こうというものである。

われわれは、このようなPAPが、つまるところ各国の企業統廃合による労働者の大量合理化・首切りと、中進国と言われる韓国やASEAN諸国の「下請け工業化」を積極的に進め、一握りのブルジョアの延命のみを求めるものであることをはっきり確認しなければならない。と同時に、これまで、米・日・西独の三国による「機関車論」から、「コンボイ（護送船団）」、そして「協調的行動論」へと発展してきた協調路線が、部分的な政策調整の領域から、さらに各国の経済構造の実体をも変えていこうとするPAP論の台頭によって、帝国主義の政治・経済の一体化をもめざした結束の強化がもくろまれていることを見ておくのでなければならない。

今回の東京サミットは、こうした帝国主義の反革命協調の飛躍的強化をはかる第一歩としてあるのである。

第三に確認すべきことは、危機に立つ帝国主義の今日的動向の基底にあるものが、あくまで反革命協調を通じた第三世界・労働者国家への敵対（戦争をも含めた）にあることである。

たしかに、日米欧の間での貿易不均衡や、ECにおける欧州統一通貨（EMS）制定を通じた欧州諸国の一体化、そして日帝の「太平洋経済圏」構想など、帝国主義各国間の利害の対立、これにもとづく独自のブロック化が進行している。先のPAP論においてもこれに積極的な米・西独・日本などに対し、競争力の弱い英・仏・伊などは衰退産業への政府保護や国有化をおし進めるNAP（消極的調整政策）をとるべきだとして対立している。また日米間の分業においても、米が航空宇宙・コンピューター・原子力の分野での独占的地位を狙っているのに対し、日帝資本がこれまでの鉄鋼・自動車・家電での優位から、さらに、米の独占分野への対抗を、政府の強力な保護のもとに行おうとして対立を深めている。最近の電電公社の政府調達分についての米資本の介入をめぐる対立はこのことをさし示している。

これらのことは、資本がまさに資本として利潤を求め、他の資本と競い合うという点において、第二の点で述べた反革命協調や一体化が、決して世界資本主義として一体となることができない、協調が資本の個別性・民族性を決して越えることができず、一時的部分的なものに終らざるをえない基本的矛盾としてあることを明白に物語っている。

しかし、問題はこうした資本の本質的性向が、それとして発現するのではなくて、まったく逆に、国家の強力な経済管理政策の下に政治的に統制しようとするところに、今日の帝国主義の歴史的本質が秘められているということである。すなわち、管理通貨制度や、国家財政による需要管理政策、あるいは金利政策など、国独資政策がとられていることを、現代帝国主義の歴史的特質をなす重要な問題としてとらえきらなければならないということである。

このことを見すごすならば、ドル防衛のために西独・日本などが協力することや、英ポンド、伊リラの破産を米・日・西独が救済していることなどは決して説明できない。ましてや、七五年ランブイエ以降のサミットを通じた協調の反革命的本質を決してとらえきることはできない。各国資本の利害の激突―市場再分割戦の激化と言うならば、サミットはまったくブルジョア共の「パイの奪い合い」以外の何ものをも意味しないではないか。

われわれは現代における労働者国家と第三世界の台頭、この危機的事態に結束して対処する以外に、一国でのどのようなブロック化も決して帝国主義の危機の解決になりえないこと、そして今日の帝国主義支配者共も、こうした「帝国主義間争闘戦」の勝利に自己の延命の道を見いだしているのでは決してないことを、現代帝国主義の基本認識としておさえておくのでなければならない。そして、まさにサミットが、帝国主義による第三世界と労働者国家への反革命対処のための共同戦略を発動させる、その協調の実体化をはかろうとする点に、本質的な反革命性をとらえきらなければならない。

第四に確認すべきことは、危機のりきりをはかる帝国主義の反革命協調が、結局のところ破産する運命にあり、「そのほかには抑圧と搾取からのがれる道のない」被抑圧民族人民の手によって打倒される以外ではないということである。

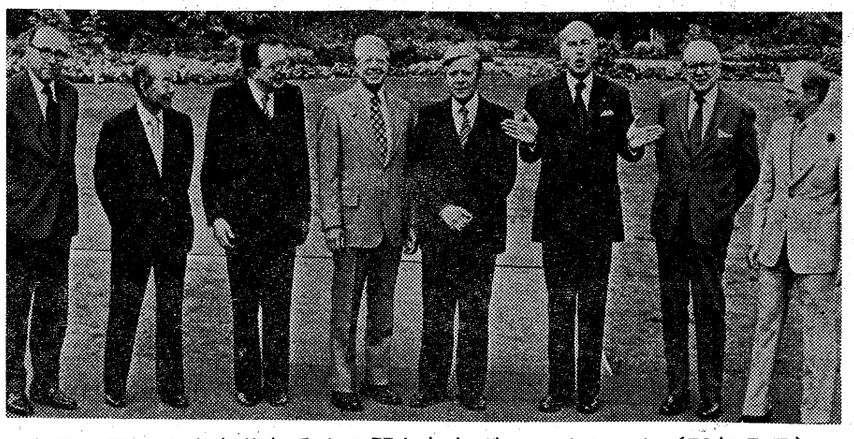
すなわち、先に述べたように、帝国主義の反革命協調は資本・ブルジョアの個別性・民族性を超越することが決してできない。その「団結」は常に動揺し、混乱し、互いに足をひっぱり合うものであり、人民の革命戦争の団結の前には敗れ去ることを本質的に宿命づけられているということである。まさにこの帝国主義ブルジョアジーに対する人民戦争の絶対的優位性ゆえに、ロシア革命に始まり、中国・ベトナム、そしてイランに至る人民の歴史的勝利の進撃はかちとられてきたのである。

したがってわれわれは、帝国主義の反革命協調も、決してそれが帝国主義の危機を解決するものでなく、ましてや、日共のいうような、対米従属から足を洗い、独占資本を規制すれば日本の経済再建の道は開ける（『日本経済への提言』）という改良的手段をいかに模索しても、「高度成長時代」の再来は夢でしかなく、人民をたぶらかす以外の何ものでもないことをはっきりと確認しなければならない。

まさに道は、あくまでも帝国主義ブルジョア支配の延命に手をかすのか、そうではなくて、被抑圧民族人民の利害を守りぬき、その勝利に貢献するのか、二つに一つである。

われわれは、ブルジョア支配の延命を夢見る一切の改良主義的幻想ときっぱりと手を切り、第三世界・労働者国家への敵対をはかる帝国主義の反革命協調・結束を、根底からくつがえす真に革命的な全人民的政治決起をかちとるものとして、東京サミット粉砕闘争をたたかいぬくのでなければならない。

このことが東京サミット粉砕に向けたわれわれの第一の基本的任務である。



世界的不況の吹き荒れる中で開かれたボン・サミット（78年7月）

サミット開催・カーター訪韓・五次防による安保―日「韓」体制の飛躍的強化と対決せよ！

今回の東京サミットでの反革命協調をもって、発動されようとしている帝国主義のまき返し戦略の具体的対象は、中東と朝鮮半島である。とりわけ、日帝・米帝は、五月の日米首脳会談を通じて結束を固め、この中東と朝鮮への共同した反撃を準備しようとしている。

それは第一には、米帝・カーターがイラン革命への露骨な敵対を、中東への介入を含めてもくろんでいることである。

米帝は、アラブ石油戦略発動を、イラン・サウジ・エジプトを米帝支配の下に抱きこむことによって抑えこもうとしてきた。その中東支配の背骨をイラン革命は打ち砕いたのである。それは単にイランを失っただけにとどまらない。パーレビを見放さざるをえなかった米帝に対し、米帝によって庇護されている他の多くのカイライ共の動揺が始まったのだ。とくに、サウジアラビアは、これまでの親米一辺倒から、独自にソ連への接近を試みたり、OPEC総会での「穏健的立場」を放棄するなど、米帝離れを開始している。

三月二七日のOPEC総会での実質一五%～二〇%の大幅値上げの決定、さらに、サミット直前の六月二六・七日の総会での再度の値上げ決定へと動いている事態が、まさにイラン革命によって再度高揚するアラブ人民の起ちあがりによって作りだされているのである。

こうした中東支配の破産的事態に対するまき返しを、米帝は、三月二六日、エジプト・イスラエル「和平」を強引に進めることによって開始した。この「和平」は、米帝の金と軍事力によってつくられた。カーターはイスラエルとエジプトをひき入れるために、イスラエルに対してはF16戦闘機、戦車、ミサイルなど総額二十二億ドルの軍事援助を、エジプトに対しては、F4戦闘機、潜水艦、戦車など十五億ドルの軍事援助を三年間にわたって与えることを約束した。これによって米帝の両国への軍事・経済援助は、既存分八十四億ドルと新規五十億ドル、合わせて百三十五億ドルが三年間に支払われることになった。そして米帝は、イスラエル・エジプトを〝中東の憲兵〟に仕立て、さらにイスラエルのハイファ、エジプトのアレキサンドリアを米艦隊の寄港地として獲得したのである。

こうしてカーターは、エジプト・イスラエルを中東の反革命拠点として固め、さらにペルシア湾常駐の第五艦隊の新設、そして中東への緊急上陸部隊の編成をなして、きわめて悪らつな中東への軍事反撃を準備しているのである。

第二には、韓国朴独裁に対して、全面的な政治・軍事支援をカーター訪韓によって与えようとしていることである。

カーターはイラン革命の勝利が決定的となった二月九日、在韓米地上軍撤退計画の一時中止を発表した。理由は「北朝鮮」の軍事力再評価の結果を見てから、ということを口実としている。しかし、これが、イラン革命におけるパーレビの末路を突きつけられ、さらに南北統一の気運が盛りあがっている中で、朴政権の動揺をおさえようとしたものであることは明白である。これに続いて、三・一～一七において、韓国史上最大といわれる米韓合同大軍事演習―「チーム・スピリット79」がきわめて意図的に行われたのである。

一月から始まった南北統一のための対話が、三月一四日の板門店での第三回接触をもって終結してしまった最大の要因は、決して朴の言う「北はなんとか対話を避けようとしている」点にあるのではない。まさに南北統一の高まりに冷水を浴びせたのが、カーターの撤退計画中止と大軍事演習であることは明白である。

こうした米帝の一連の動きをしめくくるものとして、四・一九韓国学生革命記念日に、カーターのサミット後の訪韓を発表したのである。すでに米帝が宇宙衛星で確認したといわれる「北の軍事力増強」なる報告書が作成されており、カーターはこれにもとづいて、朴・カーター会談で在韓米軍撤退の中止を正式に発表するといわれている。

まさに、そこにおいて、朴独裁支配に対する米帝カーターの全面的な支持が確約されようとしているのである。

第三には、こうしたカーターの飛躍的な朴支持の推進と連動して、日帝・大平の五次防計画を通じたより攻撃的な朝鮮出兵がもくろまれていることである。

防衛庁は、三月二〇日、「中期業務見積り」をまとめた。それは①この五年間に防衛費を現行のGNP比〇・九%から一%にひきあげ、総額十三兆円とする、②機甲師団新設、護衛艦の毎年四―五隻建艦、ミサイル装備艦の倍増、③実弾備蓄の増強を柱とし、さらには八四～八五年度での「新バッジシステム」導入も計画している。

この装備増強の発表に合わせて、二八日、永野陸幕長は防衛懇話会で、「米軍事力が北東アジアから中東中心に向けられていく可能性が強く、自らの防衛力のレベルを高める客観的要請がでてきている」として、七六年制定の「防衛大綱」の見直しと五次防推進を表明した。それは一つには、財界の防衛予算拡大の要求に応えようとするものであるが、きわめて重大なことは、これまでの日米共同作戦分担の決定的な変更をもくろんでいることである。

すなわち、昨年合意された「防衛協力指針」では、朝鮮作戦の攻撃面を米軍が、防勢面を自衛隊が担うものとされてきたが、米帝の中東派兵態勢の準備を補完するものとして、攻撃面も自衛隊が担う方向が追求され始めているのである。最近、陸上自衛隊と在沖米海兵隊との合同演習の実施が明らかとされたことは、海や空からの米韓軍の支援にとどまらない、朝鮮半島への陸上部隊の派遣をめざしたより攻撃的な日帝の共同作戦のもくろみを、疑いもなく明らかにしているのである。

したがって、六・二四カーター来日、二五天皇会見、二五―二六大平・カーター会談、二九カーター訪韓、朴・カーター会談という一連の政治過程は、朝鮮半島に対する米・日・「韓」の戦争的結束を飛躍的にはかるものとしてきわめて重大な反革命的意義を有していること、このことをわれわれははっきりと見てとるのでなければならない。

朴は日米帝の積極的支援をうけて、韓国を帝国主義者のための一大奴隷工場にしようと

人民への犠牲の転嫁と支配の強化をもくろむ大平の反動攻勢と対決し、広範な人民決起でたたかおう！

5・23弾圧をはねかえし、春期人民決起の完遂をかけて、6・23―28東京サミット粉砕に総力決起しよう！

している。38度線の休戦ラインに沿って、地上五メートル、厚さ二〇メートルの〝万里の長城〟のような巨大な壁を、「南侵」防止用としてつくり始めた。そして、民衆に対して以前にも増して過酷な弾圧を行っている。金大中をはじめ民主化運動家達は自宅に軟禁されており、買物にも自由に出かけられない状態が続いている。さらに三月九日以来、クリスチャン・アカデミーの関係者四十名が次々に連行され、四月一六日、反共法で李佑宰氏ら八名が起訴された。社会主義国家建設をめざした秘密結社を結成したという根も葉もないデッチあげの罪状がKCIAによって公表されている。

こうした朴のいわれなき民衆弾圧に対し、「我々はいま囚われている」という声明が、四・一九に向けて明らかにされた。

「我々はいま囚われている。三月一日を前後する時期に我々はまた囚われている。三月末よりまた再びいつ終るかもしれない深い軟禁の中におかれていたのである。……いっそのこと我らを監獄に送れというのが我々の主張である。」「四・一九の精神は暴力で消滅するものではなく、地の下で最も健全な生命が育っていることを知らねばならない。」

サミットの東京戒厳体制に数倍する弾圧に、カーター訪韓を目前にした韓国民衆はおかれている。しかし、韓国民衆は、金芝河の無期刑への減刑をも拒否して闘う不屈の魂を確実にうけついでいる。

サミット開催を前にした日本の労農人民は、そしてわれわれ革命的左翼は、カーター訪韓・五次防として打ちだされている安保―日「韓」体制の決定的な強化を、不屈の韓国民衆のたたかいに応えぬき、打ち破るのでなければならない。まさしく、われわれ日本人民の歴史的血債にかけて、朝鮮人民・韓国民衆への悪らつな奴隷支配をつくりだしている安保―日「韓」体制を打倒すべくたたかいぬくこと、このことが東京サミット粉砕をたたかうわれわれの第二の任務である。

つぎに見ておかなければならないことは、東京サミットが、中東や朝鮮への対外的な反動攻勢にとどまらず、日本国内の人民に対する一層の抑圧と支配強化をもくろむものであるということである。

すなわち第一には、OPECの大幅原油値上げに対抗するために、石油節約を人民の生活の統制をもって実現しようとしていることである。

IEA（国際エネルギー機関）では、サミットを前にして、五％以上の石油消費削減を決定している。そして五月二三日の先進国エネルギー専門家会議では、このIEA決定の徹底化と、消費国カルテルを結んでの石油価格上昇の抑制をとりきめている。つまり、アラブ産油国の値上げ攻勢に対して、帝国主義ブルジョア共が一定の価格水準を決めて、それ以上の価格では買わないという共同の対抗処置を合意しているのである。石油節約は単に「石油がない」ということではなくて、消費を抑えて産油国の値上げ攻勢を抑えこむ、帝国主義の反革命まき返しの一環をなすもくろみが秘められているのである。

そして、こうしたまき返し策の一層反動的なことは、その節約を、石油大消費の電力・鉄鋼などを「経済成長を維持する」という名目でタナ上げし、もっぱら人民の生活統制によって実現しようとしていることである。マイ・カーの日曜ドライブをしめ出すガソリン・スタンドの休・祝日の休業、ネオンや深夜営業、そしてテレビの深夜放送の規制、ビルの冷暖房規制がすでに大平政府によって決定されている。さらには石油・灯油の配給制の発動がもくろまれているのだ。

まさに昨年の有事立法論議で問題とされた有事の際の国民経済生活の統制が、〝エネルギー危機〟の宣伝の下に、先行的に実行されようとしていることをまずとらえておくのでなければならない。

第二には、今春米原発事故が示した危険きわまりない原子力発電を、石油代替エネルギー開発の筆頭に置いてこれを促進しようとしていることである。

これまでブルジョア共は、「大きな事故が起きていないのが、安全の何よりの証拠」と開き直り、原発反対を叫ぶ地域住民のたたかいを強引におさえつけてきた。しかし、いまや原発が全く未完成な実験段階でしかなかったことは明白である。しかも、とりわけ日本の原発は、その大半の技術をアメリカに依存し、安全確保をはかる自主技術に欠けており、まったく貧困にして無責任な原子力行政の下におかれていることも鮮明となった。

しかしながら、にもかかわらず、帝国主義支配者共は、「石油危機の救世主」として原発促進をあくまでもおし進めようとしている。それは、原子力が帝国主義ブルジョアジーにとって、石油危機への対処だけでなく、これ自体が現代世界の最先端をなす技術集約産業であり、核兵器も含めた原子力産業で、第三世界・労働者国家に対する帝国主義の生産力の優位さを確保しようとしているからである。そして米・西独・日本などはいずれも原発を自国の戦略産業におし立て、世界市場での覇を競い合っているのであり、ブルジョア共にとっては何があっても絶対に引くことのできないものなのだ。

まさにこうした帝国主義の思惑をうけて、東京サミットは、その重要な議題の一つとして原子力問題を提起しようとしている。これが、安全性を謳いながら、各国のなりふりかまわぬ原発促進を作りだすことは必定である。

第三には、高物価・増税、労働者の大合理化、農業切り捨てとして、帝国主義の危機のりきりのために、人民に犠牲が強いられようとしていることである。

これまでのサミットでの合意によって、日帝が進めてきた七％の高成長政策は、インフレの再燃と、国家財政赤字（国債依存四〇％）をひきおこし、原油値上げと「一般消費税」の来年度導入は、高物価攻勢に拍車をかけるものとしてある。さらに今回のサミットでの「産業調整」の具体化は、部落産業など零細産業や低成長産業の切り捨てを一層強力に促進し、大量解雇・労働強化をはかる〝減量経営〟の全面化を導くものである。また貿易不衡均是正を農産物自由化によってなす確約が、すでに先の日米会談で合意されている。

こうしてブルジョア共は、財政赤字のツケを人民に回し、円高のもうけには口をぬぐいながら、産油国の値上げは早速製品値上げに転嫁し、国鉄・自治体の赤字解消のための人員整理を、天下り官僚の首を切るのではなくして一般労働者の首切りでのりきるという、一事が万事人民への犠牲の転嫁で危機をのりきろうとしているのである。

サミットでの経済政策協調は、これまでの人民の生活破壊を全面的に促進する以外のものでもないのである。

第四には、こうした全階層にわたる抑圧政策を押しきるブルジョア支配の強化が、天皇をかつぎ出し、警察・軍隊の力による差別・抑圧・闘争圧殺としてめざされているということである。

とりわけ、東京サミットで行われるカーターをはじめとした各国首脳の天皇拝閲は、この間の元号法制化策動をひきつぐものとして、天皇の元首化を全世界に宣言するものである。また、サミット開催を空前の首都二万五千厳戒体制をつくり出してなそうとする攻撃が、人民のたたかいに敵意をむき出す日帝国家権力の狭山・三里塚を頂点とした闘争破壊策動の重大な一環をなしたものに他ならないことも同時に見ておくのでなければならない。

われわれは、東京サミットをテコにした、日帝・大平による人民抑圧をめざすこれらの一連の反動攻勢を総体においてとらえきっていかなければならない。そして、東京サミットがまさに、すべての人民の生活と未来を左右するきわめて重大な攻撃であることをしっかりとうけとめ、広範な人民の政治的決起をつくり出し、東京サミット粉砕をたたかいぬくことが問われているのだ。

この責務に応えきるべく総力を傾けて奮闘しぬくことがわれわれの第三の任務である。

われわれはこの四―六月のたたかいを、大平の反動攻勢と対決する春期人民決起として位置づけ、その完遂に総力をあげて取り組んできた。

この春期人民決起において、われわれがめざした第一のものは、日帝・大平の反動攻勢が東京サミット開催の一点に向けて突き進んでいることを全体の階級動向の基調としてとらえ、この反動攻勢との総対決をなすものとして、あらゆる戦線での階級的決起をつくり出そうとしたことである。

すなわち、この春の元号法制化、七九春闘圧殺、三里塚二期着工、そして狭山再審棄却など一連の権力の攻撃をめぐるたたかいが、その一つ一つが、東京サミットによる帝国主義の危機のりきりを許すのか否かを根底的に問うたたかいとしてあることを徹底してあばき出し、たたかいの階級性革命性を真に発揮すべく打ちぬこうとしたのである。

第二には、こうしたたたかいを可能なかぎ

り、あらゆる地域・職場・学園においてつくり出し、朝鮮に向けた国民の戦争動員をなしきらんとする日帝・大平の反動攻勢をうち破る、八〇年代闘争陣型の構築に向けた、われわれの大きな飛躍をかちとらんとしたことである。

第三には、三―四月においてかちとった三里塚戦士の奪還にふまえ、3・26後の一年間にわたる獄中・獄外のたたかいの経験と成果に学びあい、全党全軍の団結を固め、作風を整え、全人民の党への飛躍をめざした戦旗派の、政治・組織的広がりと主体の思想的深化をつかみとろうとしたことである。

われわれは、まさにかかる方向において、「支える会」や「連帯する会」、そして狭山全国実委のたたかいの大衆的内実をつくり出すことをめざし、その成果をもって5・20三里塚、5・23狭山をたたかいぬかんとしたのである。

東京サミット粉砕闘争は、この春のわれわれのたたかいの一切の成果を結実化するものとして、あくまで春期人民決起の完遂をめざした全党全人民の総力をあげてたたかいぬくことをわれわれの第四の任務としなければならない。

たしかに、われわれのこの春のたたかいは十分なものとは言えない。われわれはたたかいのこれまでにない広がりと、多様な内実をもった人民大衆と結び合うことの中で、多くの貴重な政治経験を学ぶと同時に、また一定の困惑をも生み出している。それは、たたかいの個別の現実性に目を奪われ、たたかいの階級的位置やわれわれのたたかいの全体性や計画性を見失ってしまうようなこと、あるいは逆にたたかいのもつ現実性や多様性を自己の狭い政治的枠によって切り捨ててしまうようなこと、こうした誤りをたたかいの現場においてつくり出していることである。こうしたことは、何よりもわれわれ戦旗派が、あらゆる方面における活動に必要な政治的知識や経験に欠けており、また現実に要請されている知識や経験を対象化し深めていくための努力に欠けていることに大きく規定されている。言いかえれば、われわれ戦旗派が青年期の党派であり、いまだ多くのものを謙虚に学びぬくことの中で全人民の党としての内実を培わねばならない過程的なものとしてあること、そして、それにとどまらず、われわれ自身が自己の過程性に安住し、あの石川一雄氏のように自らの無実を訴えるため、必勝の信念をもって獄中で文字を読み、書くことの基礎からの学習に全身全霊をかけて打ちこんだ、あのあくことのない敢闘精神、刻苦奮闘の努力を怠っているのだということである。

われわれは、こうした自らのぜい弱性を克服することなくして、東京サミット粉砕の全人民的決起は決してかちとりえないことをはっきりと胸に刻みこむのでなければならない。

そして、この春のたたかいで培ってきた大衆的たたかいの中に、東京サミット粉砕の強固な階級的意志をつくり出すべく死力を尽して奮闘しようではないか。いまこそ、本当の意味におけるレーニン主義的な宣伝・煽動・組織への飛躍が問われており、「三つの原則・四つの規範」の実践的真価が問われているのだ。小ブル的な自己純化や自己確認のためのたたかいではなく、おしつけや強要でもなく、しかし政治的確信と勇気と大胆さを失わない、真の革命的共産主義者のたたかいを主体化しきる一大試練をかちとらねばならない。

かかる重大な決意をもって、われわれは、三里塚・狭山をたたかう人々、合理化と不当処分とたたかう労働者、原発とたたかう地域住民、部落大衆や沖縄人民と共に、広範な人民決起と固く結び合い、東京サミット粉砕に勇躍決起しようではないか！

すべての同志・友人のみなさん、革命的労働者・学生・農民のみなさん！

5・23大量弾圧に示された権力の悪らつな闘争圧殺をはねかえし、6・23―28東京サミット粉砕を共にたたかいぬこう！

アラブ人民・韓国民衆と連帯し、日米「韓」の軍事一体化を打ち破ろう！

新たな人民抑圧をもくろむ大平の反動攻勢と対決する、全人民の八〇年代闘争陣型を創出しよう！

東京すわり込み闘争に応え

全国実委、各地で決起！

五・二三狭山再審決戦は、五万の巨大な人民決起によって新たな前進がかちとられた。

狭山全国実委に結集するたたかう仲間は、各地で前段集会をうちぬき、五・二三へと総決起した。

映画集会・現調を貫徹

東京西部では、五月一二日、「造花の判決」上映と、翌日、狭山現調を打ちぬき、石川氏奪還の決意を大衆的につくり出した。

また、神奈川においては、五月一七日、県北の地において総決起集会を五〇名の結集でかちとり、解放同盟・県連の講演をうけて、検察側意見書の反動性・差別性を徹底糾弾しぬいた。

狭山新証拠の発見という、石川氏の無実がますます明白となる中で、早期棄却攻撃を許さぬ人民決起のうねりを、今こそ求められている時はない。

名古屋でハンストを打ちぬく

名古屋では、狭山行動委を中心としたハンストが打ちぬかれた。

五月一七日、東京・数寄屋橋における解放同盟のすわり込み闘争に連帯して、ハンストが、栄噴水前で敢行され、二名の仲間が最後まで元気に担いぬいたのである。

当初警察権力は、これを妨害せんとしたが、大衆的反撃の前に介入を断念、逆に解放同盟をはじめ、多くの人民の支援、三〇〇名を越える署名がよせられたのである。

このハンストを通じて、分散―停滞をしいられてきた愛知の狭山闘争の再出発がかちとられた意義はきわめて大きい。

こうして、大きな決戦局面をむかえた狭山再審闘争の全国的爆発をかちとり、五・二三大決起の一翼をきりひらいたのである。

公判スケジュール

6月7日 管制塔G（水野・山下他）午前10時～東京地裁
同日 三月要塞1G（反対同盟・栗田他）午後1時～千葉地裁
8日 第8ゲート3G（勢川他）午前10時～東京地裁
13日 第8ゲート2G（吉崎他） 午前10時～東京地裁
18日 三月要塞2G（仲宗根他）午後1時～千葉地裁
20日 五・二〇2G（細野・松本・長谷川美里他）午後1時～東京地裁
21日 五・二〇3G（長谷川優子・仲宗根京子・青池・野崎他）午前10時～東京地裁
22日 管制塔G 午前10時～東京地裁
同日 二月要塞（宮崎・内野・渡辺他）午後1時～千葉地裁
7月4日 第8ゲート2G 午前10時～
同日 第8ゲート3G 午後1時～

6月1日発行

80年安保シリーズNo.2

日米安保体制

―その歴史と現段階―

対朝鮮共同作戦態勢へと転換する日米安保の歴史と実態をあばく

定価 300円 戦旗社

高裁四ッ谷の早期棄却を許さぬ

狭山臨戦態勢の構築を！

解放同盟を先頭に

五万の人民決起

全国行進に応え、8・9へ総進撃せよ

全国の同志・友人のみなさん！

五・二三狭山再審闘争は、〈石川無実〉を鮮明に示す新証拠の発見をかちとりつつ、部落大衆の不屈の再決起によって大成功のうちに闘いぬかれた。

権力の予想をはるかに上回る五万もの人民決起、とりわけその大半を占めた部落大衆の不滅の闘魂は、狭山闘争圧殺―戦争体制構築にかける権力の思惑を粉々に打ち砕き、その心胆を寒からしめたといえる。五・二三大決起によって狭山再審決戦の真の序幕は切っておとされたのである。

全国実委、意気さかんに独自集会かちとる

この日、午後に予定された「石川一雄不当逮捕十六ヵ年糾弾・狭山再審要求・三大闘争勝利五・二三中央総決起集会」にむけて、会場の明治公園には午前中から全国の部落大衆・労学市民がつめかけた。

会場左翼に陣取った「狭山全国実行委の赤ゼッケン部隊は、十時半から独自の総決起集会を開始、五・二三にむけた各地での闘いの報告が次々となされていく。

「われわれ一人一人が決意を固め、闘いぬく中から勝利の道が切り開かれる」（愛知でハンスト戦を打ちぬいた狭山行動委）、「テント村での部落大衆との交流を通じて『人間を変える運動』としての部落解放闘争の内実をはじめてつかみとることができた」（坐り込み連帯行動を闘ったテント村現地行動隊）というような真摯で力強い報告に全員が耳を傾け、心からの「異議ナシ」で応える中で、闘う意気はますます高まっていった。

八・九上告棄却以降のとりくみの不十分性を克服し、内実をもった実行委運動の構築をめざして奮闘してきた全国実委の部隊は、意気さかんに独自集会をかちとって全体集会に臨んでいったのである。

8・9百万人決起めざし、決戦体制への突入を宣言

午後一時、いよいよ全体集会が開始された。

「本日はわき返るような大結集をかちとりました。新証拠の発見や学者・知識人の立ち上がりなど、闘いの正しさはますます明らかになっているが、暗黒の時代の再現をもくろむ権力の早期棄却策動を軽視してはならない。日本の民主主義運動にかつてない、八・九までの継続闘争を闘いぬきましょう」と高らかに闘争宣言を発した解放同盟松井委員長のあいさつに続き、狭山闘争本部西岡智氏の基調報告が行われる。

西岡氏は、①石川さん御両親を先頭に行われた全国行脚（四月）の中で、部落の老若男女こぞってのたち上がりが出てきていること、②十鑑定人の一人である大野氏（国語学者）が五月十二日の国語学会で、脅迫状筆跡問題をめぐり〈石川無実〉の勇気ある報告を行ったこと、③発見された新証拠（脅迫状の日付問題）の新規性・明白性は明らかであり、マスコミも大きくとりあげていること、④十七日からの坐り込みに対する都民の大反響、などの有利な情勢と、日帝・四ッ谷の早期棄却のもくろみをふまえ、「本日十一時、弁護団は高裁へ意見書を提出した。今日から闘いが始まる。何としても事実審理を行わせるために、今日から八月九日まで解放同盟は全国行進を行い、決定的瞬間には狭山ストや同盟休校など、大衆的実力闘争で闘いぬく」と、断固たる闘いの方針をうち出した。立錐の余地もないほどに会場を埋めつくした五万の民衆は一斉に拍手と喚声でこの提起に応える。会場の三分の二、いや八割が黄色いゼッケンの部落大衆だ。

権力弾圧をはねのけ、進撃する全国実委四百の部隊

「老壮青幼」四結合で石川さん奪還誓う

諸政党や支援団体、全障連などの連帯あいさつがあいつぎ、盛り上がる気運の中で解放同盟の決意表明にうつっていく。

「部落の婦人は、自分の腹をいためた子の問題として狭山を闘ってきた。必ず正義が勝つことを信じる」（婦人部森田さん）、「五・二三を起爆剤とし、三里塚や反戦の闘いと結びついて精一杯闘う」（青年部むつみ君）といった決意に続き、全国子ども会の代表（大阪・

埼玉・高知）数十名が壇上にあがり、声を精一杯にはりあげて同盟休校の闘いを報告する。そのけなげな姿に、とりまく人々は目をうるませて拍手をあびせた。この子らの未来のためにも、狭山の勝利と部落の完全解放を何としてもかちとらねばならないのだ！

文字通り老壮青幼の四結合で闘いぬく部落大衆のすさまじい闘魂は、参加者の胸をゆさぶり、闘う決意をいやが上にもかりたてたのであった。

石川アピールに応え、再審棄却を絶対阻止せよ！

集会の最後をしめくくって、獄中生活十七年目をむかえた石川氏のアピールである。

「人生のもっともよい時期、青春の十六年間をメチャクチャにされた私は、あえて『復讐』を言いたい。権力者に鉄槌を浴びせよう！」「上告審の二の舞をふまぬよう、細心の注意で裁判所を監視してほしい。今日から二カ月、これが正念場だ」。

今こそこの石川アピールに応えぬくことが問われているのだ。全参加者は心を一つにし、決戦突入の気概に燃えて、都内二コースに分かれての大デモンストレーションに向かっていったのである。

38名を不当逮捕

狭山―サミットを貫く 反動攻撃打ち破れ！

＜石川無実＞＜再審要求＞を叫ぶ労学・部落大衆の五・二三決起に対し、権力機動隊は到底許すことのできない不当弾圧に打って出た。

周到に準備された指揮体制の下、各所で暴力的挑発と無差別逮捕の暴挙がしかけられ、解放同盟二名、自治労十一名、全逓一名をはじめ三十八名のデモ参加者が不当逮捕されたのである（全国実委十一名）。

整然と行われていたデモ行進に対し、指揮官車の号令一下、並列規制を行っていた機動隊が突然殴る蹴るの暴行を加え、別動の機動隊と私服が一斉に襲いかかって無抵抗の者をも強引に拉致しさるという、言語道断の大弾圧が白昼公然と行われたのだ。

この弾圧の計画性、無法性を見るならば、その本質は余りに明らかである。

それは第一に、五万人民決起にみられる狭山再審決戦の大高揚が、日帝支配者どもに深刻な打撃を与えているということである。「叩かれても叩かれても立ち上がる」部落大衆と狭山勢力に対する権力者の底知れぬ恐怖が、焦りに満ちた凶暴な弾圧へと彼ら自身をかりたてているのだ。

第二に、こうした権力の意をうけ、新証拠の発見に追いつめられた日帝・四ッ谷による早期再審棄却の先制攻撃としてこの弾圧はある。われわれは満こうの怒りと、最大限の警戒心をもって、権力の番犬・四ッ谷の動向をおさえておくのでなければならないのである。

そして第三にわれわれは、この弾圧が六月東京サミットに向けた全左翼勢力の「予防拘禁」とも言うべき反革命攻撃としてあることをも、しっかりととらえ返しておかなければならない。狭山―サミットを貫く日帝・大平の全面的な反動攻勢こそが、この弾圧の本質なのだ。

全ての同志諸君！ 友人のみなさん！

決戦の火ぶたは切られた。大平の反動攻勢に抗し、不当弾圧をはねのけて、＜石川氏奪還＞＜事実審理開始＞のその日まで、敢然と闘いぬこうではないか！ 8・9百万人大集会の実現めざし、部落大衆と共に進撃しよう！

5・17―23

部落大衆の決死すわり込みに 連帯行動貫徹（全国実委）

狭山再審闘争勝利―石川氏実力奪還にむけて邁進する解放同盟は、五・二三闘争の前段として数寄屋橋公園に座り込み、一週間にわたる闘いを貫徹した。

五月一七日正午、数寄屋橋公園に結集した解放同盟関東ブロックの行動隊員は、二つの大テントを設営し、「東京高裁は再審をおこなえ」と題した看板をテントの上に立てて闘争体制を整えた。その後、有楽町・新橋駅頭、および数寄屋橋一帯にわかれて情宣に突入、夜十時まで石川さんの無実を訴え、朝七時まで抗議の座り込み、翌朝九時、再び情宣を開始する。

一九日、東京高裁に対する第一波の抗議行動が闘いとられた。午前九時、高裁前に結集した行動隊員は、ゼッケンをつけるやいなや高裁に突入し、玄関を占拠する。隊員たちは口々に「石川さんは無実だ！」「四ッ谷にあわせろ」と叫び、再審棄却を策す高裁を厳しく追及する。高裁は廷吏を多数動員して殴るけるなどして隊員を排除するという暴挙に出てきた。解放同盟は一歩もひるむことなくこれと闘い、高裁を怒りの渦にたたきこんだのである。

二一、二二両日、交代でかけつけた九州、中・四国ブロック、近畿・東海ブロックの隊員により、第二、第三波の攻撃が貫徹された。所内に突入してシュプレヒコールを行い、あるいは玄関前でうずまくように怒りのデモを行うなど、連日戦闘的な闘いが、四ッ谷に対してなされていったのである。

これとともに情宣活動においても多大な成果がかちとられた。用意したビラが足りなくなり、署名用紙がきれてしまうほどの反響をよび起こす中、一週間でビラ約十五万枚を配り、署名約五百名、カンパは十万円に達した。とりわけ数寄屋橋公園付近では、連日朝九時から夜十時までの情宣がおこなわれ、あたり一帯は「東京高裁は再審をおこなえ」という熱気につつみこまれたのである。

全ての仲間のみなさん！

われわれ全国実委はかかる解放同盟の闘いに応えて現地行動隊を結成し、テント村で一週間、ねおきを共にして闘いぬいた。その中でわれわれは新ためて解放運動の底の深さと、解放同盟の固い決意を実感する思いであった。とりわけ自立自闘の思想をかかげた部落大衆の闘いにわれわれはまだ多くを学ばねばならない。

獄中十七年目に突入した石川氏の闘魂をうけとめ、狭山再審闘争勝利―部落完全解放にむけて突き進もう！

「再審を行え！」連日高裁・四ッ谷への抗議行動を貫徹する解放同盟・支援

5・20

アドバルーン たいまつデモ

飛行を実力阻止

成田厳戒体制打ち破り

騒音直下に九千の労農学

二期工事内に人民の用水を！

三里塚強行開港一年目にあたる五月二〇日、二期工事阻止・空港廃港へ向けた現地総決起闘争が圧倒的に打ちぬかれた。集会は当初予定の三倍近い九千の結集で政府・公団の闘争鎮静化策動を粉砕し、また終日飛行阻止行動が展開された。午後、滑走路南側の飛行は完全にストップ、八〇便が大混乱に陥ったのである。

われわれ戦旗派も、この間の「連帯する会」・「支える会」などの地域活動、救援闘争の成果を集約し、二期工事阻止・廃港に向けた陣型の構築をも目ざし大衆的決起で共に闘いぬいたのである。

耳つんざく轟音に一人ひとりが怒り新た

今回の会場は従来と異り、秋葉哲さんが提供された朝倉の畑地だ。飛行機が飛びたつ時の轟音はすさまじい。とても「騒音」といえたものではない。やっぱり廃港しかない――初めての人も何十回目の人も同じ決意を固める。

会場の後方では木の根用水の動力源になる風車の模型（実物の四分の一）が展示され、たたかう農業をめざす三里塚の意気を示している。

こうして全国から続々と結集した人々と三里塚農民の心が一つになる中で、午後一時、集会は開始された。

天神峰・石毛さんの開会宣言に続いて、反対同盟・北原事務局長が基調報告に立つ。「この不便な場所をあえて選んだのは、全国の人々に騒音を受けとめてもらいたいからだ。私たちの正当性はこの一年間で証明されている。同盟は闘っていける農業に全体で取り組み、全国の住民と連帯し、労農学の力で必ず廃港に追いこむ」。発言は一度轟音で中断されたが、空高くアドバルーンが舞い上がるや、飛行機は一機も飛ばなくなった。

次に、戸村委員長があいさつを行う。「岩沢さんの頭の上を通るあの飛行機を撃ち落としていい――誰が乗っていようと、そういう心情やむことない」。発言のさ中、更に飛行を阻止すべく風船が次々と上げられる。

騒音に対する怒りを新たに、廃港の決意固める労農学（朝倉）

全国人民の力で二期阻止・廃港へ！

動労千葉、新関西空港反対同盟、日本原、北富士、成田市民の会、原発とめろ実行委、全金本山、全金田中機械と全国から連帯のあいさつと、二期工事阻止・廃港への決意が続く。騒音に苦しむ周辺住民を代表する芝山南部の土屋さんは、「公団がアメとムチの攻撃をかけてきており、周辺住民も主体的にかかわっていかなくてはならない」と訴えた。

解放同盟中央本部の西岡氏は、「反権力闘争として徹底して闘ってきた農民魂に学んでこの間闘ってきた」と述べ、狭山再審闘争勝利のために全人民的決起を呼びかけた。更に東京実行委、連帯する会、廃港要求宣言の会、東水労、沖縄の代表が次々と発言に立つ。

全国全人民の広汎な五・二〇決起は、開港と成田ミニ戒厳令による闘争圧殺策動を粉砕し、森山の年内二期工事着工発言を後退させるに至ったのである。

用地内十七戸を代表して小川源さんが二期絶対粉砕・木の根用水建設を訴えた後、事務局から水の根用水についての経過報告が行われた。「農振・成田用水をひかえ、どういうわれわれ自身の農業を作っていくのか。討議を深め、同盟全体が一丸となり二期阻止の闘いとして用水をやりたい。衆知を集め新しい畑地かんがいを行う、それを三里塚に広げていくのだ」。

続いて老人行動隊相川さん、婦人行動隊長谷川さんの決意表明、内田行動隊長の行動提起、熱田さんの閉会宣言ののちデモ行進に入り、昼間の行動を終えた。

第二、第三の空港包囲・占拠で裁判を勝利させよう！

集会半ば、島さんから石井さんに司会が変わり、開港阻止決戦被告全国家族会の方々が登壇する。「被告の母となってはじめて婦人行動隊の心のうちがわかった」と目黒君のお母さん。「闘いはこれから」と佐藤君のお父さん。水野同志のお母さん、吉崎同志の両親も共に壇上に立ち、圧倒的な拍手につつまれた。

三・二六東峰グループの乙坂さん、星野君死刑阻止の荒川君に続いて、「管制塔公判を勝利させる会」の福富さんが発言する。「裁判といえない復讐の場に立たされた被告と共に闘う。第二、第三の空港包囲・占拠で廃港に追い込み、裁判を勝利させよう」。更に顧問弁護団から裁判闘争の現状が報告された。

われわれ自身の闘う農業を！

最後に同盟の決意表明がなされた。

「生きるためには廃港しかない」

夜八時、反対同盟のたいまつデモを中心にして更なる飛行阻止行動をくり広げる。

轟音直下で闘いぬく岩山の内田行動隊長の発言は一五〇〇の労農学の心を打った。「廃港か、この騒音下の生活か、生きるためには廃港しかない。このたいまつの炎が一体となって燃える時、革命のともしびが巨大な炎となる」。

すべての同志・友人のみなさん！

五・二〇闘争は、第一に、全国人民の広汎な決起で闘争圧殺攻撃を打ち破り、第二に、たった半日とはいえ轟音を体験することで二期工事阻止・完全廃港しかないことを一人ひとりが決意した。第三に、全三救を中心に奪還戦士との団結を打ち固め、管制塔戦士奪還・裁判闘争勝利の展望を明らかにした。この成果を守りぬき、木の根人民用水の圧倒的建設で、二期阻止・完全廃港の爆発をかちとろう！

5・16首都圏集会

島氏、木の根用水建設訴える

五月一六日、日本橋公会堂において「三里塚廃港の七九年に！首都圏集会」が開かれた。

前田俊彦氏の開会宣言ののち、労働運動（樋口氏）、農民運動（加瀬氏）、反原発運動（高木氏）の各特別報告が行われた。

続いて「三里塚反対同盟はかく闘う」との報告が島事務局次長から提起される。「もう一度、百姓の原点にもどり、農業の問題を考えていく。木の根用水は戦術ではなく三里塚で闘う百姓の戦略だ」。さらに反対同盟の五氏が紹介され小川源さんのアピールが読みあげられた。

「弾圧の嵐をはね返そう」、反処分就労闘争の現状と決意表明、闘争団体のあいさつが次々となされ、最後に五・二〇現地闘争をたたかう決議を採択し、盛会のうちに集会を終えた。

5・27

日本原12・18弾圧打ち破り

自主耕作をかちとる

――七月公判闘争に勝利せよ！――

五月二七日、日本原では反戦馬天嶺の呼びかけによる自主耕作地の田植えと援農が、多数の人民の手によって圧倒的にかちとられた。

前日の激しいヒョウ・雷雨がうそのように良く晴れた二七日の日本原では、①奥鉄男さんが耕作権を有する演習場内自主耕作地の田植え、②各農家への援農、③婦人民主クラブによる自主耕作地生産の大豆を使用した「日本原味噌」の製造が、一斉かつ大々的に行われた。

自主耕作を最大の敵とする自衛隊は、数日来の張り込みに加え、ヘリコプターまで動員して阻止を企てたにもかかわらず、われわれは固いスクラムのもと、この妨害を粉砕し、すべての農作業を早期に完了しぬいた。しかもその上、演習場内に新たな自主耕作地を開墾し、日帝・自衛隊の演習場使用に対し一大打撃を与えることに成功した。

今回の自主耕作は、第一に、昨年一二月一八日、演習場及びその周辺からの農民の放逐を目的とした軍用道路建設において、二十四名の不当逮捕という自衛隊がしかけてきた一大弾圧を打ち破るものとして、第二に、六―七月の日本原公判闘争に勝利する地平を実力でかちとることをめざした重要なたたかいとして打ちぬかれたのである。われわれはこの勝利を通して、自衛隊の農民圧殺策動―演習場の無制約使用策動を粉砕したのみならず、軍用道路建設に賛成し、公判闘争から召還をはじめた日共の演習場支援策動をも粉砕した。

「死ぬまで耕作を続ける」（奥鉄男さん）決意を支援全体の決意として、日帝・自衛隊の朝鮮侵略反革命戦争に向けた日本原基地を解体するまで、われわれは闘いぬかねばならない。

とりわけ、七月一一日、日本原訴訟公判には自衛隊が業務命令で前日から大動員を企り、傍聴席からの人民の締め出しを狙っていることは確実で、われわれは、この公判闘争に勝利する動員と情宣を今から強力に進めねばならない。

全国の同志・友人諸君！　三里塚闘争に固く連帯し、日本原闘争勝利に向けともにたたかいぬこう！

反対同盟の分断ねらう

農業振興センターへ先制打！

5月1日、政府・公団の意をうけた農業振興センターが天神峰の「千葉県花植木センター」内に設置されるという情報を得、反対同盟は抗議にかけつけた。

この農業振興センターこそ、反対同盟の切り崩しをねらう農振計画の現実的な推進軸としてある。今年一月、各部落での成田用水説明会以来具体的な動向がなかった中で、政府・公団は三月の森山運輸相の「二期年内着工」宣言をうけ、農振計画実施にむけた第二弾としてうって出ようとしたのだ。

「反対同盟切り崩しをねらう農業振興センター粉砕！」のむしろ旗を先頭に、反対同盟二百は続々と事務所にのりこむ。センター所長＝吉井某はじめ職員をひきづり出し、鋭い追及がなされる。

「農業振興センターとはいかなる主旨のものか明らかにせよ！」（北原氏）―「空港の見返りとして地域の農業の振興をはかるものです…。」

天神峰の石毛さんから、「地元の農業振興というのなら昨年干バッで被害が大きかったので用水をひきたいと思うのだがどうだ。」所長＝吉井は二期用地内の同盟員石毛さんということを確認すると「それはちょっと…」と返答につまる。間髪を入れず「同じ天神峰の小川（嘉吉さん）だが孫子の代までこの地で百姓を続けたい。用地内の公団の買収地を五～六町歩も一生貸してくれ！（一同笑い）」―「用地内の方ではどうも…」

政府・公団のもくろみを逆手にとった用地内同盟のしたたかな追及に逃げ場を失いしどろもどろだ。

「農民殺し・農業破壊の空港建設に抗し、この地で生き・闘いぬいている用地内の反対同盟こそ真の農業を目指す人々だ。その人々の利益を守れないで何が農業振興だ！　真の農業振興とはこうした人々と共に空港をつぶすことだ。政府・公団のお先棒をかつぐセンターは反対同盟を分断し、切りくずそうとするもの以外ではない」（北原氏）。地域の農業振興なる彼らのお題目の本質が徹底的に暴露された。

この日、同盟は『二期工事について公団と一切関係しない』『地元住民の意向を第一とする』等三点の確認書をとりつけ、「今後、政府・公団の尖兵になりさがるならば反対同盟は実力でセンターをたたき出す！」とセンター設置に先制的打撃を浴びせた。

政府の農政にかわる闘う人民の「農」を！

「闘う農業」をうち出した五・二〇闘争を前に反対同盟内で激烈な討論がまきおこった。

青年行動隊が八～九年振りに新聞を出し口火を切った。「この三里塚の土と共に闘う農民としてどう生きるのか、どう俺とお前が手を結び、どう闘ってゆくのかという根本に立ちもどろう」「木の根灌漑の話の中で新ためて木の根三戸の農民の木の根で農をうちこみ闘い続けるというゆるぎない心にふれた。木の根灌漑の本質はここにある」「木の根三戸の農民との心と心の出会いぬきにしては同盟の心を一つにすることは不可能だ」

そして青行隊は部落集会を提起した。「闘う心を一つにして木の根灌漑を建設してゆく過程の中で、その姿勢の中で俺ら闘う農民の農業のあり方を具体的に検討してゆこう」「この大事な論議を中途半端に終らしちゃなんねえ」

「俺たち青行はここ数年まとまった動きを形づくってこなかった」「そんな俺たちがこの木の根灌漑の話を契機にしてお互いの心のひだをつなぎ合わせた」。青行隊は先頭に立った。（引用・青行隊通信第一号より）

これをうけて**18・19日**、各部落で部落集会が一斉にもたれ深夜まで討論が続く。木の根用水を切り口に「闘う農業」とは何か？　農地を要塞にするとはどういうことか？　今後の反対同盟の団結の質とは？

今、三里塚から農民の手による「闘う農業」の芽が着実に育とうとしている。そしてそれは必ず空港を大包囲し、とどめをさすだろう。

「これがオレの気持だ」―小川七郎さん宅新築成る

木の根三兄弟の一人小川七郎さんはこのたび家の新築を行った。農作業のあい間、夜仕事とコツコツ自分一人の手で五カ月もかかってしあげたのだ。

5月15日、北原市議選勝利祝いをかね、七郎さん宅で落成式を盛大に行った。政府・公団が躍起になって「年内着工だ」「強制執行だ」などとわめきたてようが、「これがオレの〝要塞〟だ」と静かに語る七郎さんの決意は岩のようだ。

「ズーッとここに住んでゆく気持でいるよ。別にわたしらは何ももっていないし、土地も多くないが、ここをどいてしまったら何んにもなんねえからナ」、かあちゃんの「こう」さんは語る。

大地がゆれる程のエンジンテストの響音と機動隊のサーチライトの中、また一つ農民の闘いの結晶が木の根に生まれた。

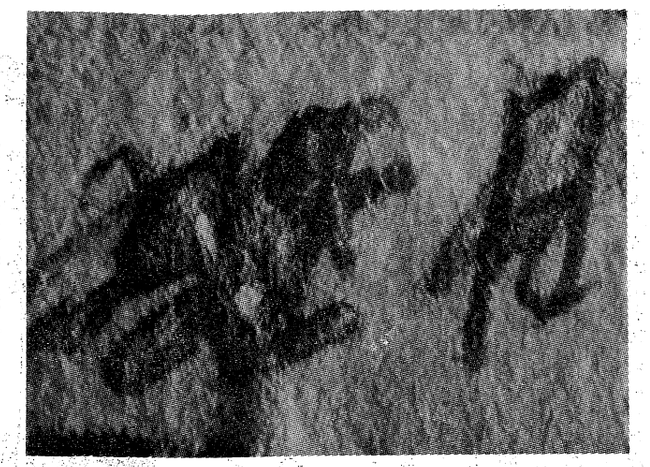
石川氏無実の新証拠発見

事実審理開始を要求する巨万の決起をつくり出せ！

五月一六日、狭山弁護団は大阪で記者会見を行い、石川氏の無実と権力による犯人デッチ上げを明白に物語る「新証拠」の発見を明らかにした。

この重大な新事実は、マスコミ（五月一七日付各紙、五月二五日付アサヒグラフ等）にも大々的にとりあげられ、五月一二日の大野晋学習院大教授の国語学会報告などとも相まって、えん罪糾明―再審開始を要求する世論は大きな広がりをみせている。

われわれは、この二つの事実を有力な武器として、八・九大集会を当面の環とする狭山再審決戦の勝利にむけて、広範な宣伝・煽動戦の組織化を闘いとっていかねばならない。



部落大衆の執念が新証拠を発見した

今回発見された新証拠は、狭山事件の真犯人が書いた脅迫状の中の日付訂正をめぐる「一字の違い」である。この「たった一字」が石川氏の無実を明白に物語る重大な証拠となっているのである。

そもそもこの脅迫状では、「子供の命がほ知かたら4月×日の夜に……」とある原文の「4」と「×」の文字が乱雑に消され、その下に「五月2日」という文字がつけ加えられている。この「×」のうち左側の「2」の字は比較的判読しやすいが、右側は読みにくく、肉眼や白黒写真では「8」とも「9」とも読める。警察も弁護団も裁判所も、この文字を「8」と読み、訂正された元の文字は十六年間にわたって「28日」と判読され、疑うものがなかったのである。

ところが昨年八月、弁護側鑑定人が行ったカラー写真での拡大撮影写真に、真実の文字が浮び上った。ボールペンで書かれた脅迫状と、訂正に用いたブルーブラックのインクの色素の違いが、カラーフィルムへの感光の違いとして歴然とあらわれた。「28」ではなく「29」だったのだ。

この「一字の違い」のもつ決定的意味は、しかしながら本年二月、狭山弁護団事務局の雛元昌弘氏が気付くまで明らかにされなかった。狭山現地に事務局を置くなど、狭山新証拠の発掘に全力をあげてきた部落解放同盟の、そして弁護団の執念が、この新事実の重大な意味を遂にさぐりあてたのである。

「一字の違い」が石川無実を証明する

この脅迫状は、警察のデッチ上げた「三大物証」（カバン・時計・万年筆）などと違い、直接真犯人と結びつく数少い証拠物件である（であるが故に権力は、似ても似つかぬ脅迫状筆跡と石川氏自筆の文字との「類似性」を強弁するために、デタラメ極まりない「筆跡鑑定」にヤッキとなってきたのである）。

真犯人であれば、もとの文字が「28」であったか「29」であったかはもちろん知っているし、また、「29」を「28」と言いかえても犯人にとっては何の利益もないわけであるから、真実を述べるのが当然である。一般の刑事事件においても、直接的な物証が得られず自供に頼る場合、こうした「真犯人しか知り得ない事実」の有無が、自供の信ぴょう性を裏付ける有力な証拠とされるのである。

ところが「犯人」にデッチ上げられた石川氏はどうであったのか。

六月二四日付、二九日付の警察官調書、七月二日付の検察官調書（二通）のすべてにおいて石川氏は、消された日付を二八日としている。とりわけ、七月二日付調書においては、ごていねいにも「この時被疑者は脅迫状の文句をノートの用紙に横書して差出した」（！）といういわくつきで、「この文の内容で一番の少時とあるのは、書きなおす時にボールペンで消しました。〃四月二八日〃というのも〃五月二日〃と書きなおし……」という石川氏自身の文章が添付されている。

真犯人であれば当然知っている元の文字「29」を石川氏は知らなかった！「29」を「28」と読んだのは警察であり、（このことは六月一日の警察側筆跡鑑定書にもはっきり記載されている）、石川氏は取調官の言うがままに、真実を知らず、犯人でないが故に「29」を「28」と「読んだ」。

この「一字の違い」こそは、石川氏が青天白日無実であり、一連の「自白」が権力による巧妙なデッチあげ以外の何ものでもないことを雄弁に物語る決定的な新証拠なのだ。

大野鑑定人、国語学会で勇気ある訴え

この脅迫状をめぐる疑惑は、（日付）問題解明の以前から、様々に指摘されてきた。

先の引用にもあったが、訂正に用いた筆記具の問題（石川氏は「ボールペン」と言っているが実際に用いられたのはブルーブラックのインクである。この点についても、石川氏が「ウソ」をつく理由は一切なく、警察の言うがままに「自供」させられたのは明白である）や、訂正された元の宛名「少時様」の謎（石川氏はこれに何の説明もできず、一審判決も「空想の産物」などと決めつけたのであるが、のちに「長島少時」という人物が狭山署管内に実在していることが判明した）、さらに、筆跡そのものの非類似性など、「犯人デッチあげ」を証明する事実は数えきれないほどなのだ。

こうした疑惑を一切とりあげず、科学的鑑定を否定しさった二審寺尾判決、上告棄却文のデタラメさに対して、筆跡鑑定にあたった大野晋氏は、五月一二日、学問的良心にかけての勇気ある行動をおこした。

この日、京都で行われた国語学会春季大会二日目の研究報告終了後、帰りかけた参加者の大多数（約四百名）に対して、大野氏は、脅迫状や石川氏自筆の上申書など参考資料を配布し、よびかけを行った。

脅迫状はひらがなを万葉がな的に漢字を用いて筆記しているが、これは「知能程度が低い」ことを偽装するための作為である。脅迫状では「池」や「時」という字がきちんと書けているが石川さんには書けない。こうした事実の一つ一つを大野氏は説明した上で、「当時の石川氏にこの脅迫状は書けるものではないと私は判断した」「私は学問的能力を傾けて鑑定書を書いたつもりだ。専門家のみなさんが私の意見に同意していただけるのなら、各々の意見を表明してほしい。」と参加者に問いかけたのである。

国語学の分野において多くの学問的業績を有する著名な国語学者である大野氏のこの勇気ある訴えは、参加者の大きな反響をよび、質問する人があいついだといわれている。権力支配を維持するために、真実に目をつぶり良心や人間性の一切をかなぐり捨てて恥じない司法権力の巨大な悪業に対する人間的抵抗の灯火が、ここにも一つともったのである。

部落大衆の闘魂に学び、再審決戦に絶対勝利しよう！

この新証拠をはじめとする弁護側意見書は、石川氏不当逮捕十七周年の五月二三日、東京高裁に提出された。同じくこの日、部落解放同盟は、（屈辱の八月九日）上告棄却二周年のその日にむけて、東京・狭山現地から鹿児島に至る全国行進に出発した。

すさまじい執念をもって忘れ去られてきた新証拠をさぐり出し、燃えるような闘魂をもって炎天下の全国行進を敢行する部落大衆のこの闘いに、われわれは何としても応えなければならない。

東京高裁・四ッ谷を窓口として現在闘いぬかれている狭山再審闘争の攻防の環は、何よりも、四ッ谷の再審早期棄却のもくろみをうち破り、事実審理を開かせることである。

このことにとって今回の新証拠発見は、何にもかえがたい有力な武器となっている。二月二八日に提出された検察側意見書は、その時点までに提出された証拠に対し「新規性・明白性なし」という「意見」を述べているが、この新証拠は意見書以降に提出されたものであり、内容的にも再審開始に十分な「新規性・明白性」を有している。

新証拠発見によっていよいよ追いつめられ、棄却か事実審理開始かの二者択一を迫られている四ッ谷に対して、われわれは二審や上告審当時の闘いを上回る、巨大な人民の闘いの

渦をつくりだし、事実審理を開かざるをえないような状態へと追いこんでいかねばならない。

炎天下の全国行進—網の目行動を敢行する部落大衆の闘魂に応え、全国の職場で地域で学園で、無実の新証拠を武器とする徹底的な宣伝・煽動戦を組織しぬこう。

石川氏の無念を今こそうけとめ、無実の新証拠を高くかざして高裁—四ッ谷に迫りぬこう！（事実審理を開始せよ！）を合言葉に、全国百万の人民決起で再審勝利をかちとろうではないか！

現実化する80年安保

朝鮮出兵ねらう五次防、日米合同演習を許すな！

一九八〇年を前にして日米共同作戦体制づくりと自衛隊の増強が急ピッチで進められている。

日米安保の実質改定ともいうべき「防衛協力の指針」決定以降、韓国経済の行き詰まりとも相まって朝鮮危機への軍事介入体制が固められつつあるのだ。

われわれはこれら一連の過程をしっかりと把みとり、八〇年代、安保—日「韓」体制打倒への戦列を打ち固めていかなければならない。

朝鮮危機・カーター戦略下で進む自衛隊増強

このあいだまで「韓国の奇跡」と言われていた高度経済成長は、その行き詰まりによって、米日の軍事・経済援助、朴の民衆弾圧の馬脚を表わし始めている。こうした中で、カーターが東京サミット後に訪韓する。

カーターは大平や朴との会談において在韓米地上軍撤退計画の中止（もしくは大幅縮小）を表明し、朴体制護持の日米韓軍事連動の具体化を提唱する。そこにおいて自衛隊の増強が急速に浮上してくるのである。

七〇年代アメリカのアジア戦略は、「戦闘のアジア人化」であった。アメリカ軍はアジアから大幅に引きあげ海空の打撃力へと純化し、それだけ日帝の役割は増大した。

戦後初期、圧倒的強大さを誇ったアメリカの経済力低下は軍事負担を過重なものとし、第三世界の台頭は世界支配力を低めた。その下で日本帝国主義はアジア人民や「労働者国家」と対抗し、新植民地主義的支配に相当の力をさかない限り延命できない時代に入ったのである。この傾向は構造的であり、強弱はともかく日本軍増強と日米共同軍事体制への推力を形成している。

一九八〇年に始まる五次防、日米の本格的同演習、防衛三法改悪、戦時立法策定は、まにこれに対応する日帝の八〇年代軍事外交路線に沿うものなのだ。

朝鮮作戦めざす 自衛隊の五次防計画

まず、五次防—一九八〇～八四年度主要装備五ヵ年計画についてみていこう。

これまでの装備計画では、全体の予算規模決定が最大の懸案であった。四次防が石油ショック・資源高騰で予算不足となり、結局予定通り進まなかったのを教訓として五次防では予算総額は示されていない。

だがそれ以上に重大な相違は、四次防までがまがりなりにも「専守防衛」であったのに対し、五次防では「わが国周辺の安全に貢献する」（防衛計画大綱）目的で戦時即応の軍事力がめざされていることである。周辺とはまさに朝鮮・東南アジアであり、海外派兵が日程に上ったということである。

先の日米首脳会談で大平は、「防衛費がGNPの一％以下でもいけない」と発言した。五次防では現在の〇・九％を毎年〇・〇二％ずつ引きあげ、八四年度一％にする予定で、その総額は防衛庁発足以来の経費に匹敵する十三兆円といわれている。

陸上自衛隊は八〇年度に機甲師団（北海道）の第七師団＋第一戦車団）、独立混成団（四国）を編成するとともに、全体として砲火力・機動力・対戦車能力を強め、弾薬備蓄や定員充足率も高めて即戦態勢にする方針である。

海上自衛隊は、来年度から魚雷の常時搭載を行うとともに、艦隊護衛艦を各護衛隊群に二隻（「ターター」積載護衛艦用の誘導ミサイル現在一隻）ずつとし、艦対艦、艦対空ミサイルも装備する。これまでの海峡封鎖・対潜に加え、米第七艦隊護衛の主力になろうとしている。

航空自衛隊は、陸・海とも関連するが、対空ミサイルの更新、F15・E2C・P3C導入に伴うバッジ・システムの更新を行う。防勢・攻勢両作戦を展開することもめざしている。

このほか自衛隊専用の統合マイクロ通信網の完成、中央指揮所建設と八二年運用開始、運用面では戦時立法、日米共同作戦などが進められる。

これらの計画によって大綱に示された軍備は八四年にほぼ達成される。その後をどうするか、防衛庁・自衛隊では昨年来一九八五～九四年統合防衛長期見積りの策定をなし、五次防もこれとの関連で出されていることは明らかだ。永野統幕議長の「大綱見直し」発言（3・28）や、猪木正道（大平の諮問機関「総合安保グループ」議長）のGNP二％論は八〇年代半ば、更に大綱の枠をこえることを示唆しているのである。

活発化する日米合同演習と日米「韓」軍事交流

次にみておかなければならないのは、日米「韓」の軍事結合の進展である。

すでに「日米防衛協力の指針」決定以降、チーム・スピリット79に参加した米軍F15機との空中戦技訓練、海自艦隊が米空母ミッドウェーを囲み護衛する輪形陣訓練などがなされている。チーム・スピリット79は、韓国軍十一万二千、米軍五万六千、合計十六万八千と最大規模で行われ、日本全土が前進中継拠点となった。

今年度、陸では図上作戦演習に米軍幹部が公的には初参加し、空では攻勢・防勢に分かれての訓練を始め、更に陸海空統合部隊と米軍との本格的戦闘演習が立案作業中である。

五月二四～三〇日には、統幕が統率する陸海空統合の初の実動演習が展開された。図上演習の経緯は不明だが、二八～三〇日、北海道の道南に敵軍が接近、上陸先遣隊として札幌近くに敵空挺団が降下、これを撃滅するとの想定で、関東・東北・北海道の約一万五千人、戦車・トラックなど一五〇両、艦艇一〇隻、航空機九〇機が参加した。作戦は主に防空、海上、航空輸送、上陸、空地共同戦闘などである。

こうして一九八〇年からは本格的な日米共同作戦演習が開始されようとしている。

陸上自衛隊は来年から在沖米海兵隊との合同実戦訓練をやる予定である。「海兵隊とは戦略が違うが、違った発想から吸収するものがあり、よい刺激になる」（5・31永野陸幕長）。

在沖米海兵隊は「西太平洋におけるいかなる地点にも敏速に展開できるよう編成強化された」部隊であり、この間の米「韓」演習では上陸作戦の主力である。朝鮮有事の米軍作戦計画では二日以内に投入されることになっている。何を吸収するのか、何がよい刺激か、まさに陸上自衛隊が「国連軍」としてあるいは「災害救助」の名目で朝鮮上陸するための合同訓練に他ならない。

航空自衛隊は空母・B52との共同訓練を計画している。当面B52・空母を敵に見たてるとしているが、次いで共同作戦訓練に入ることは明白である。B52は朝鮮有事のさい即時出撃し、米空母は朝鮮海域へ出動する。つまり、朝鮮作戦における米軍の海空打撃力防護である。

合同演習、訓練の活発化とともに、日米「韓」の軍事交流も頻繁になってきた。永野陸幕長、高品統幕議長、山下防衛庁長官の訪韓・訪米、金韓国合同参謀会議議長、ロジャース米陸軍参謀長の来日等々、枚挙にいとまがない。

上陸用舟艇「さつま」から上陸演習をする自衛隊員（青森県大湊湾）

坂田元防衛庁長官らは4・30日韓議員安保協結成を足がかりに米をも加えた議員安保協結成へ動いており、外務省も安保の検討委員会を結成するなど、安保―日「韓」体制の戦争体制としての確立を政治的に支える方向である。

強まる第二の朝鮮戦争策動と対決し、現実化する八〇年安保を粉砕せよ！

八〇年代における日米安保・自衛隊の軍事的肥大化を支えるイデオロギーが総合安全保障論である。

それは五月一八日、防衛大卒業式でみられたように、資源・市場が第三世界人民に制約される中で深まる帝国主義の危機への対処に関する国民的合意の形成を基盤として、より直接的には朝鮮危機への軍事介入をめざしている。それ故にこそ「総合安保の根幹は防衛力の充実整備」（大平首相訓示）なのだ。アジア人民が「ビジネスマンの利益を守るために日本軍がやってくる」と危惧しているのはまったく正当なのである。

大平は福田と若干やり方は違うが、ソ連脅威論をふりまき、日米共同防衛、自衛隊増強への合意を巧みに形成しようとしている。公明を抱きこみ、防衛三法（防衛庁設置法、自衛隊法、国防会議の構成等に関する法律）の抜本改悪、戦時立法、国民総動員などの作業を着実におし進めている。

われわれは、大平「総合安保」のこのような内実をしっかりと把みとり、日米安保の相互防衛条約化、八〇年安保の現実化と対決し、朝鮮人民への歴史的血債にかけ、強まる第二の朝鮮戦争策動を打ち破る全人民的戦列をうち固めていかなければならない。

管制塔戦士奪還・用水建設貫徹 80年安保粉砕に向け

夏期一時金 二千万カンパを

全国の同志・友人のみなさん！『戦旗』読者のみなさん！　共産主義者同盟（戦旗派）より、夏期一時金二千万カンパの要請を訴えます。

今春、われわれは、3・26戦士に対する高額保釈金攻撃と、11・4戦士に対する一審実刑判決をはねのけ、獄中戦士の奪還をすべての同志・友人・家族の圧倒的なカンパに支えられてかちとりました。

現在、われわれに問われていることは、第一に、今獄中にある管制塔三戦士の年内奪還に向け、圧倒的なカンパ活動をやりぬくことであり、予想される高額保釈金攻撃を再度打ち破ることであります。

第二に、三里塚二期工区決戦に向け、反対同盟が全国に発した『木の根かんがい用水』の建設に、今夏全党をあげて取り組むことです。

昨年の横堀要塞建設にも増して、この用水建設は重要なたたかいとなっています。廃港を何としてもかちとる上で、また三里塚の農業を人民の手で作りだしていく上でも、ぜひとも実現させていかねばならないものです。

第三に、東京サミット開催を機に、反動攻勢を強める日帝・大平との総対決と、八〇年代に向けた全党全人民の戦闘陣型をうち固める上で、何としても戦旗派の組織的前進をかちとらねばなりません。これを保証しぬく資金の結集は心須の課題となっています。

とりわけ、全国党体制と、全国政治新聞たる『戦旗』の自力発行体制を着実に実現しつつあるわれわれにとって、第二期印刷所建設の最終的実現を何としてもなしきり、八〇年代へ向けた戦闘体制を構築することが問われています。

不況の名の下に吹き荒れる首切り攻撃、人民収奪、生活破壊が進行するきびしい情勢の中で、われわれは、真に労農人民に応えぬき、プロレタリア革命を担いぬく党建設をなしきることをめざして奮闘しています。

すべての同志・友人のみなさん！　この革命的事業を、われわれと共に担いぬくべく、夏期一時金三割カンパを心より訴えます。

一九七九年　六月五日

共産主義者同盟（戦旗派）

5.31 管制塔第八回公判

月三回全日指定に反撃

五月三一日、管制塔の第八回公判が行われ、六名の検察側証人調べがなされた。その席上、花尻裁判長は、今後の公判期日指定を公表した。期日指定は毎月三回全日公判というもので、前裁判長坂本が策動した月三回廷半日公判を上回る超過密スケジュールである。

この日、被告・傍聴団からの沸きあがる怒りが法廷を満たしたが、太田被告は、この三回指定を弾劾し必ず粉砕するとの宣言を行ったのだった。

被告団・弁護団の話に耳を傾けるかのようなポーズをこの間とってきた花尻裁判長は、こうして今日、強権的訴訟指揮でひんしゅくをかった坂本を上回る反動として被告団・弁護団の前に立ちふさがっている。

弁護人の公判出廷を困難ならしめ、また公判準備を不可能ならしめ、弁護活動を封殺せんとするかかる攻撃は、他方で昨今の日弁連の体制翼賛化とあいまって、闘う人民を暗黒裁判の下に圧殺せんとするものである。

本年三月三〇日、弁護人抜き裁判特例法をめぐる法務省・最高裁・日弁連の三者協議において、いわゆる「三者協議合意」なるものがとりかわされた。内容は、①弁護士会は、特別案件についての国選依頼に速やかに応ずる、そのため受任候補者名簿を作成する。②弁護士会は弁護人の不当な訴訟活動に対し懲戒を迅速に行う、そのための会則改訂を行う。③裁判所は国選弁護人に相当額の報酬支給のための予算措置に努力する。④法務省は国選弁護人の身の安全・危害補償について検討する、というものである。この合意に基づいて、五月二六日行われた日弁連総会は、弁護人の理由なき不出頭、退廷および辞任をしてはならないという「倫理規定」を制定し、懲戒委員会の外部委員四名の増員（これまでは三名）を決定した。

この日、日弁連総会には良識ある先進的な弁護士多数を先頭に、救援戦線を担う労・学・市民がつめかけ、「弁護活動の自殺行為を許すな！」と訴えたが、それを無視して強行されたのである。

こうして管制塔裁判は、こんにち花尻の月三回指定、弁護士会の自主規制下で、きびしい局面をむかえているが、他方で被告救援会、家族会、「勝利させる会」の闘いも着実に前進していることを見のがすことはできない。「管制塔裁判を勝利させる会」は、三一日公判後、発足後第二回の会合を開き、いよいよ本格的な活動に足を踏みこんだ。七月一日には、広範な救援戦線の結集をもって、権力弾圧に抗する力を結集する試みが練られている。

同志諸君！　われわれは被告救援会・家族会・勝利させる会の闘いの前進に貢献し、広汎な人民と共に花尻の反動的攻撃を打ち破ってゆこうではないか。

佐藤同志不当逮捕さる

弾圧に抗し、3・26の歴史的勝利守りぬけ！

五月二三日、石川一雄氏の再審を求める大集会が開催された明治公園において、わが戦旗派の佐藤一郎同志が、権力のうす汚れた手によって連れ去られた。

佐藤同志は、決戦段階に突入し、緊迫の度を増す狭山再審闘争へ参加すべく、明治公園へかけつけたが、警視庁・千葉県警によって令状逮捕されたものである。

令状は、昨年三・二六管制塔占拠闘争の共謀ということである。

ブルジョア・マスコミは、憎悪をむきだしにして「管制塔破壊の黒幕」と報じたが、それはとりもなおさず、佐藤同志が、狭山現地にあって埼玉糾弾共闘の創設と発展に長年にわたって貢献してきた、あるいは、三里塚決戦のさなかにあっては、戦旗派の先頭にたって勇猛果敢に闘いぬき、党・革命勢力のけん引車として奮闘してきたことに対する、権力の階級的憎悪以外ではない。

佐藤同志への弾圧は、人民の正義と大義に立たんとして闘う戦旗派に対する階級的報復としてある。

佐藤同志は、三・二六指名手配に抗し、一年にわたって不屈に闘いぬいてきた。われわれは、佐藤同志とともに組織破壊策動を断固としてはね返し、三・二六の歴史的勝利を守りぬいていこうではないか！